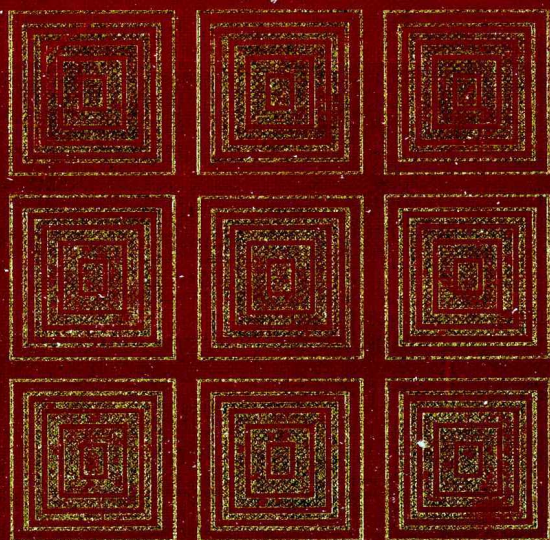
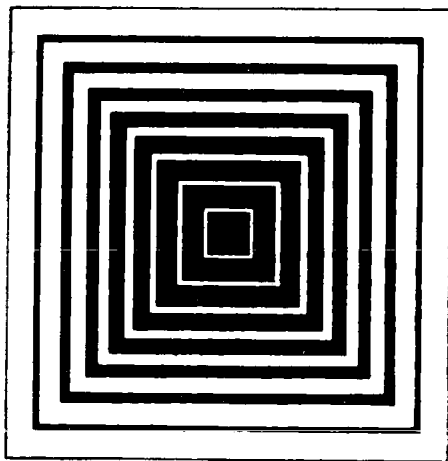




王朝物語集

I

竹取物語・伊勢物語
狭衣物語・堤中納言物語



日本の古典—5

河出書房新社

日本の古典 5
王朝物語集 I

昭和四十六年六月三十日 初版印刷

昭和四十六年七月十五日 初版発行

訳者 川端康成他

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価 一、一〇〇円

©1971



愛知県知立市の八橋のかきつばた（伊勢物語・九段）

目次 王朝物語集 I

竹取物語……………	川端 康成 訳 一九	解説	丸谷 才一 三
伊勢物語……………	中村真一郎 訳 二七	解説	池田 利夫 三〇
狭衣物語……………	中村真一郎 訳 二八	注 釈	池田弥三郎 三九
堤中納言物語……………	中村真一郎 訳 二五	挿 画	小林 古径
△作品鑑賞のための古典△			
契沖	久松 潜一 訳 三七		岩崎 巴人
河社……………	久松 潜一 訳 三〇	カ ッ ト	大山 忠作
無名草子……………	久松 潜一 訳 三〇		榊原 和夫
海量	池田 利夫 訳 三三	解説写真	
伊勢物語新考……………	池田 利夫 訳 三三		
			堤中納言物語
			狭衣物語
			伊勢物語
			竹取物語
			新井 勝利
			岡本弥寿子

四つの物語

1 『伊勢物語』

比喩的に説明するほうが呑みこみやすいのではないかと思う。

たとえばここに樋口一葉の短篇小説があつて、もともと原稿がところどころ失われているし(題の意味が判らないのは案外そのせいかもしれない)、さらに半井桃水や斎藤緑雨の筆が加わっているらしい。ところが数十年後、この短篇小説の作中人物についての考証を和田芳恵がおこない、欄外に注の形で書きこんだのだが、それが編集と印刷の際の手落ちから本文のなかにまぎれてしまった。……

現在われわれが読む『伊勢物語』は、近代日本文学の見立てでゆけば大体こんな具合のものではなからうか。まず平安初期に書かれ、筆写の過程で(改作および注の二つの方向で)さまざまの人の手が加わったり整理されたりしたあげく、鎌倉中期から後期、あるいは室町初期にかけて今の形に定まったのがこの作品なのである。すなわち、『伊勢物語』の部分的な作者の一人として藤原定家の名をあげることもすらも、あるいは許されるかもしれない。近代の意識からすればまさに奇怪な話ではあるが、校訂者と改作者とのあいだの距離はさほど大きなものではなかったらしい。学者であることと詩人であることが容易に一致し得

る時代には、これはごくありふれた話だったのである。もう一度、近代日本文学に見立てて言えば、たとえば萩原朔太郎の『猫町』の残欠を手にした西脇順三郎が、一方では自由に改作したり、他方では地理や風俗について注をつけたりした場合を空想してみれば、事情はかなり見当がつくのではなからうか。

すこぶる長期にわたってのこのような集団的制作が、『伊勢物語』にとって不利だったとはいえないけれども、ない。ひょっとすると、この本の最上の部分は改作者によつて書かれたものかもしれないのである。そのくらい良質の読者によつてはじめて、古典は後世へと伝えられる。それは遠い昔の文学史における作品の運命であつた。殊に、歌物語『伊勢物語』の主な魅力を形づくる、歌と物語、詩と散文の明確な文体的対立は、散文の機能についてかなり

我ももきくふふれい
 じうにわこちをて心地
 こねくたきふれい
 はなもやふくもえおて
 きくもきくふふれい
 おもふふれい

自覚的になった後世の人によって、その方向へと洗練されたもののように思われてならない。原『伊勢物語』にもともとあった詩と散文との対立を、後人が鮮かに意識した結果、それをいっそう強めたのだと見ても同じことである。

しかしその反面、集団制作による不利ももちろんあるわけで、それが最もはなだしいのは、注の混入によって主人公の性格がぼやけたことであろう。ただしここで性格と言うのは、ハムレットが優柔不断な男か行動的なルネッサンス人かというような意味ではない。いわば作品自体の様式からむ話である。「昔、男ありけり」と書いたとき、元の作者は、その主人公が在原業平であるとあらわに示したわけではなかった。彼はただ、業平という稀代の色好みで、貴族で、旅人で、しかも色好みであれば当然（と当時の人は信じていた）歌の上手である人を、主人公としてほめかすために、「男」という匿名的な呼称を用いたのである。この工夫によって、業平は見事に物語の幻のなかに生き、伝説の主人公となることができたのだが、後世は『伊勢物語』の主人公を、歴史上の実在の人物である在原業平へと次第に近づけて行ったらしい。その極端な場合が史的知識のテキストへの混入である。それゆえわれわれは『伊勢物語』を読む場合、近代文学の作品に対するときとは違って、作品として安定した状態にあるものではなく、文学史の軌跡としての作品とも言うしかない混沌とした何かを読むことになる。それはテキストではないテキスト、作品ではない作品を読むという、奇怪な体験となるであらう。

しかしこれはまた、一民族の文化の源泉をさぐるためにはかえって好都合だという条件にもなろうし、この歌物語に収められている歌が、近代文学的な意味での詩であるよ



奈良市・春日野。

「むかし、ある男が、元服をしたばかりに、奈良の旧都の春日の里へ、——そこに自分の領地があったので、——鷹狩りに行った。

その里に、たいそう若く美しい姉妹の娘が住んでいた。」（伊勢物語・一段）

長野県・浅間山。

「むかし、ある男がいた。都が住みづらかったのであろうか、東國のほうへ行って住む場所を求めようと、友だち一、二人と連れ立って出かけた。」そして途中、信濃の国の浅間山に煙の立つのを見て歌を詠んだ。「信濃なる浅間の岳に立つ煙をちこち人の見やはがめぬ」（伊勢物語・八段）



りもむしろ、古代文学的ないし民俗学的な呪言である（それゆえ女たちは「男」の愛を受け入れるのである）という性格は、こうした事情を根底的に支えるにちがいない。こうして『伊勢物語』は長く日本人を魅惑しつづけ、さらには日本文学の性格を規定することになる。たとえばこの長篇小説（？）の断片的・放棄的な印象のせいで、異様な美しさは、現代日本の小説にもしばしば見受けるものである。

2 『竹取物語』と『堤中納言物語』

『竹取物語』における内容の幼さと構成の緊密さとの対照は、ほとんど衝撃的なほどである。おそらくこれ以後に書かれたはずの『伊勢物語』が極めて散漫なもので、むしろ放恣と呼んでさえいいくらい構成を欠如していることにくらべると、たぶん中国文学の強い影響下に作られたものではないかと想像される。このことは、漢文読み下しふうの文体がかなり多く含まれていることからも言い得るかもしれない。しかし、その堅牢な枠のなかに入れられているものは古代日本人のあどけない憧れと夢想で、こうして日本小説史はその発端のところに、一篇の上質な童話を奇蹟的に持つことになった。

しかしもつと奇蹟的なのは、『堤中納言物語』という優れた短篇小説集を、平安後期という早い時期に持っていることかもしれない。一般に短篇小説とは、都会的・近代的な機智と感覚の芸術なのだが（このへんの事情はわが近代文学の諸作品を手がかりにして考えてはいけない）、『堤中納言物語』の各篇にはそういう色彩がすこぶる鮮かなのである。

そして、各篇の興味もさることながら、この物語全体がいかにも短篇小説らしい多様性を誇っていることは舌を巻くしかない。短篇小説集は、単なる短篇小説の寄せ集めではなく、本全体が一つの単位を形づくるように、題材や語り口や長短やで目さきを変え、読者を倦きさせないようになければならぬのだが（芥川竜之介の短篇小説集『夜来雨』や『黄雀風』などには、そういう正統的な用意があったと思う）、この物語の作者ないし編者は、そういう芸まで心得ている隅に置けない人だったわけである。今、編者と言ったのは、この意味不明の題名は『包みの物語』から来たのではないか、いくつかあった短篇小説を誰

東京都・隅田川。

「なお旅をつづけて行くくと、武蔵の国と下総の国との境にたいそう大きな河がある。それを隅田川という。その河の岸辺に一行が足をとめて、遙かな旅路を思いやると、なんと限りもなく遠くへ来ってしまったものだという気がしてきて、歎きがつきない。」（伊勢物語・九段）
やがて一行が渡し船に乗ろうとした時、白い鳥が水の上で魚をとっていたので、渡守に尋ねると、「これが、あの都鳥」といふ。それを聞いて、「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」と詠んだ。この話にちなんで、のちに言問橋ができた。これは、その言問橋からとった写真。

女あるを新くもたせをかくて
 とつてつてつてつてつてつて
 だきつてかくてつてつてつて
 つてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて
 へつてつてつてつてつてつて

既中納言 花梅の草紙
 月くくくくくくくくくくくく
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりり

上 竹取物語の写本
(武藤本)。

下 堤中納言物語の写
本(榊原忠次旧蔵本)。

かが今で言う風呂敷に包んで(その人がつまり編者なわけ
 だが)現行のような形に編集したのではないかという、武
 田祐吉の説が忘れられないからだ。この武田の説は、『堤
 中納言物語』という短篇小説集のしゃれっ気を題名の駄洒
 落という面から見事に押えた、恐しいほどの卓見であろ
 う。

3 『狭衣物語』

母もなく乳母もなくてうち返し

春の新田に物をこそ思へ

荒くのみ母代風に乱れつつ

梅も桜もわれうせぬべし

いずれも今姫君の置いて行った扇に書いてある歌で、そ
 の拙さに狭衣は呆れかえるのだが、たしかにこれは末世の
 われわれでさえ思わず笑い出さずにはいられないくらいひ

だいいものだ。まして王朝ふうの趣味と教養にひたりきつて
 いた当時の読者にどんな効果をもたらしたかは、想像する
 にかたくな。彼らはおそらく腹をかかえ、涙を流して笑
 ったことだろう。
 だが、この二首は岩波古典文学大系本(内閣文庫所蔵本
 を底本とする)によったもので、まだしも手ぬるいのであ
 る。これがいわゆる第三類本(中村真一郎の現代語訳はそ
 のうちの一つを底本とするらしい)になると、

母もなく乳母もなくて春の荒田をうち返し

うち返し返す返すも物をこそ思へ

柳桜をよりあはせ

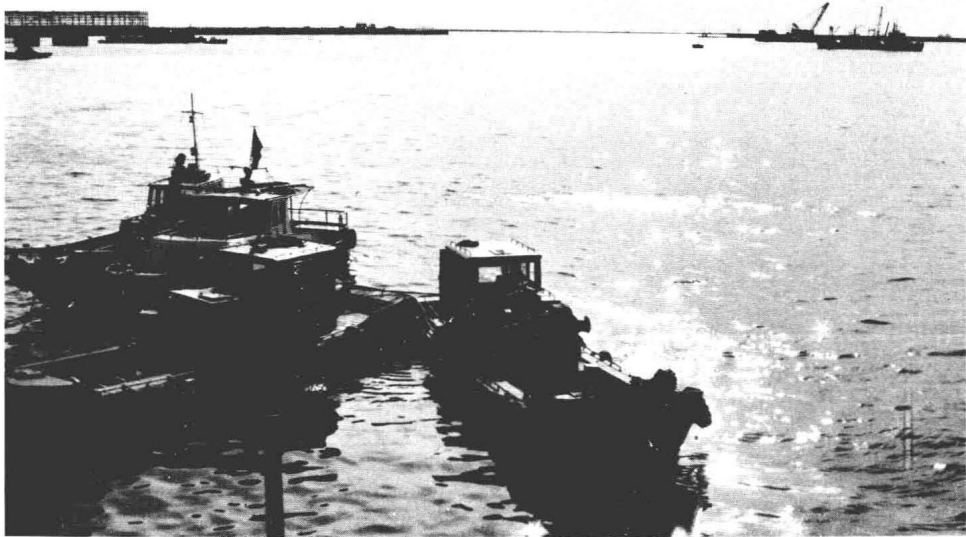
うせざめれば乱ぬめり

と改められ、「三十一文字とだに知り給はで、何しにか
 は扇の絵の歌詠まんとはおぼしやらん」(歌は三十一文字
 ということさえ知らないで、扇の歌を詠もうなどとは、よ



くも思いついたものだ」——中村訳——と狭衣を驚かすことになる。本文批評のほうから言えば内閣文庫所蔵本が善本というわけなのだろうが、すくなくともこの部分に関する限り、わたしは第三類本の誇張のほうを採りたいような気がしてならない。こちらにこそ『狭衣物語』の特質がじつに鮮明に示されていると思うからである。つまりここには、風俗への激しい関心と、グロテスクなほどの滑稽とがある。そしてこの両者が正統的な風俗小説の道具立てであることは、たとえば永井荷風の『おかめ笹』を見てもかなり納得がゆくにちがいない。内閣文庫所蔵本にも充分に見られる風俗小説的な性格は、この版によっていよいよ強調され、ますます正統的な感じになっているのである。

もちろん『狭衣物語』のこういう工夫は、『源氏物語』の影響であった。今姫君は末摘花と同じように「あり深く」(「彫りこんだようにやや太くて力強く」——岩波大系本注)、つまり優雅でない字を書く。また、末摘花と同じ

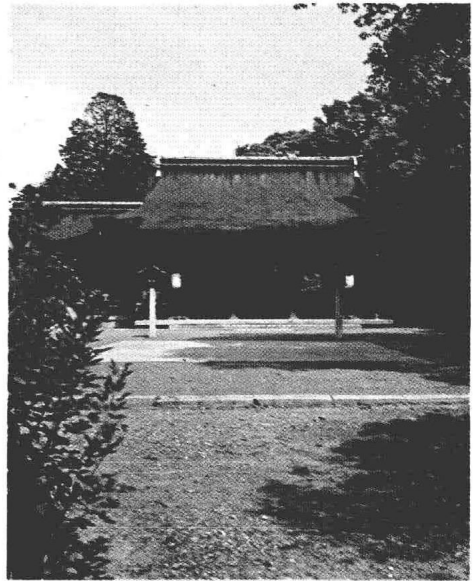


大阪市・住吉海岸。むかし「住吉の浜」といわれた所だが、近年の埋立によって海岸線はずっと沖までせりだしている。

「むかし、ある男が、和泉の国へ行った。住吉の郡、住吉の里、住吉の浜を通ると、たいそう景色がよいので、たびたび馬からおりて歩いて行った。」(伊勢物語・六八段)

静岡県・宇津の山。

「さらに旅をつづけて、駿河の国に着いた。宇津の山にさしかかると、これから一行が分け入ろうとする道はたいそう暗くて細い上に、萬や楓が茂っていかにも心細い。これはつらい目にあうことだと思っていると、ひとりの修業僧に出会った。」(伊勢物語・九段)



ように箸にも棒にもかからぬ歌しか詠めない。しかし末摘花の場合ははじめはともかく後には自分で何とか、たとえ二度目もまた前と同じ唐衣の歌ではあるにせよ（それゆえ光源氏に、「唐衣またからころもからころもかへす」がへすも唐衣なる」とからかわれる）作ることができたのに、今姫君は二度目のときにもこの前に母代が代って詠んだ歌をくりかえすだけである。このようなじめめきは、同時代の読者のサディスティックな笑いを否応なしに誘うものであったに相違ない。

が、悪条件はこれだけではない。末摘花は「普賢菩薩の乗物」、つまり白象の、紅蓮華いろの鼻のような、赤くて大きな鼻の醜女である。ところが今姫君のほうは、育ちが悪いため行儀作法はいっこう心得ていないけれど、なかなかの美女のように描かれている。すなわち王朝小説は『狭衣物語』の段階に達したとき、美人ならばかならず教養があり、醜女はきつと無教養であるというような『源氏物語』ふうの秩序立った世界観に反抗するだけの、意地の悪いものの見方を身につけたわけなのだ。今姫君が外見はなかなかの美形であるにもかかわらず内容はさっぱりなこととは、いちおうのところ今姫君に対する温情に似ていながら、しかし人生の諸相に対するきびしい観察として、読者の笑いをいっそう残酷なものにするに相違ない。

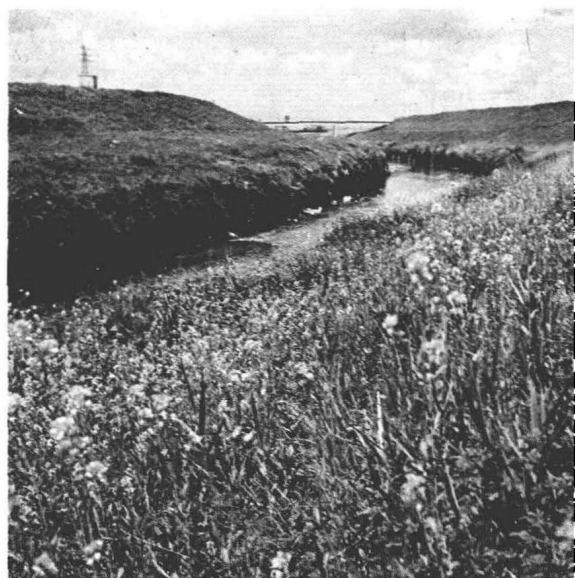
そして末摘花はなかなかの名門の娘ではあるけれど、まさか彼女を入内させようなどとは誰も考えないのに、今姫君のほうは入内寸前のところまでゆく。こんなひどい歌を詠む娘が、あるいは、歌が五七五七七で成立つことすらわきまえていない娘が、女御・更衣のなかに加わりそうになるのは、風俗小説の基本的な魅力の一つであるゴシップ的要素のための絶好の題材であると言わなければならない。

大阪府・水無瀬の宮。

「むかし、惟喬親王と申す親王がおいでになった。山崎の向うの水無瀬という所に離宮があった。親王は毎年の桜の花ざかりには、その御殿にお出かけになった。その際、右馬頭であった人をいつも連れておいでになった。」（伊勢物語・八二段）この惟喬親王は、伊勢物語の主要な登場人物の一人である。「右馬頭」は業平をさす。

京都市・小野にある惟喬親王の墓。

親王は出家して、この小野に隠棲していた。雪深い正月、年老いた右馬頭（業平）は、親王の庵室に参上し、「忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは」と詠む。（伊勢物語・八三段）



読者は笑いころげたり戦慄したりしたあげく、これが世の中というものかと感慨に耽ることになる。つまりゴシップという世俗への好奇心は、社会への認識の端緒なのである。

一般に社会と風俗をあつかう長篇小説の作家は、みなそのへんの事情を心得て書いてゆくわけだが、王朝小説の歴史においては、『狭衣物語』の作家が最も世俗への好奇心を持ち合せていたようだ。これはおそらく、どうやらこの物語の作者であるらしい女房、六条斎院宣旨が、『源氏物語』の風俗小説的側面の、極めて優れた読者であったためであろう。『源氏物語』の作者がいれば手さぐりで、わりあ



い無自覚的に探究して行つた風俗小説という局面を、それによって触発され刺激された読者が、今度は作家になつて意識的に切り開いてゆく。小説史のそういう展開を單なる模倣と見るのは当らないし、このような形で影響を受けた作品を目して源氏垂流物語と呼ぶのはいささか粗雑なような気がする。六条斎院宣旨は決して垂流ではなかった。そのことはたとえば、今姫君の入内の前後に宰将中將が忍び入つて関係し、それが母代に氣づかれて大騒ぎになるあたりの、一種カーニバル的（とロシア形式主義の批評家ならば言うかもしれない）な筆致を見れば明らかであろう。こういうグロテスクな乱痴氣騒ぎは、『源氏物語』ではいつも表面に出ないように抑えられているのである。『狭衣物語』は逆に、そういう人生の相を巧みにあばき立てようとしている。

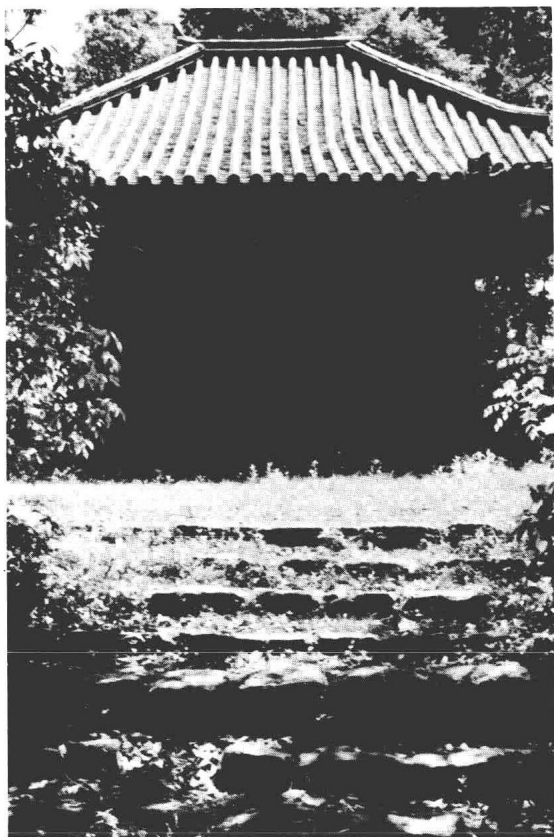
今姫君の入内にまつわる筋は、この作家の宮廷に対する微妙な感情のもつれの所産であるとも言えるかもしれない。宮廷に憧れながらも宮廷を侮辱したくてたまらないという、典型的なスノッパリを示しているからである。子供の口を借りて、帝の禿頭をからかうなどというくだり

牧方市・文野の渚の院跡。

惟喬親王と右馬頭の一行が、鷹狩でこのあたりにやってきた。ところが、渚の院の桜が美しいので、狩はそっちのけにして、酒をくみ交し、和歌を詠むのに熱中した。右馬頭は、「世の中になえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と詠む。（伊勢物語・八二段）

牧方市・天の川。

鷹狩から帰る途中、また右馬頭が酒をさし上げると、惟喬親王は、「交野を狩して、天の河のはとりに来た、ということを書いて歌を詠め」とおっしゃった。そこで右馬頭は、「狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは米にけり」と詠んで奉った。（伊勢物語・八二段）



は、それがもっと単純な形で出た例であろう。『狭衣物語』では宮廷の描写がすくなくよく言われているけれども、この小説に必要なだけは充分に、そしてこの小説なりの形で——たとえば、

今日か今日かと待ちかねておられたことであるから、帝はひじょうにかわいく思われる。日ごろから見慣れている者たちでさえ、珍しくくらいに美しい赤子だと見えるほどだったから、帝はもう、瞬時も目が離されない気になられて、膝にのせ、一日じゅう、眺めておられる。もちろん、むさくるしい物のお世話まで御自分でなされる。たいへんにおそれおいことである。女御はそのありさ

まを見て、これが男の子であつたら。……と、また残念に思つた。

という具合に、宮廷はあつかわれているのだ。その度合をもっと増したならば、『狭衣物語』の魅力は減ずることになったにちがいない。

というのは、この長篇小説は、当時の社会全体をいわば縦わりにとらえようとする態度で書かれているからである。まず最上層には帝と后妃がいて、次に皇族と貴族が位置を占め、こうして次第に降りて行つたあげく、最下層には、賀茂の祭を樂しみにするあまり「道で出会うとすぐ、生活の苦しさの話といっしょに当日の晴れ着の算段の相談をする」

都の庶民や、「苗代に水を引く仕事も忘れて、ひたすら、見物に着手て行く野良着を洗濯することに熱中している」遠い田舎の民がいる。そして中間のところには、かどわかされた飛鳥井の女から、「あれはいつたい、何者だろう、行幸や賀茂の祭のときに、別当のうしろから恐ろしそうな弓矢や刀などをさげて歩いて行くなかに、ああした男がよくいるが、見るだに恐ろしい気がする」と思われた男がよくあって、これはつまりやがて勃興する武士階級の姿を女房の眼から見たものにほかならない。社会の各層をくまなく押えようとする作者が、このような上流以外の階級をも見のがさずに的確着実に描いていることは、淀の舟着場の情景でも判ると思う。

京都市・山科の安祥寺。
「むかし、田村の帝と
申上げる天皇がおいで
になった。その時の女
御に多賀幾子と申す方
がおられた。その方が
亡くなられて、安祥寺
でこの法事を行なった。」
(伊勢物語・七七段)
業平もこの法事に出席
し、歌を詠む。



しかし当代の社会全体を一篇の物語のなかに封じこめようとするとき、最も効果的なのは、諸階級に一つ一つ当ってゆくことではなく、複数的な階級を衝突させる技法のはずである。六条斎院宣旨はそのことをたとえば淀の舟着場でもおこなっているが、それがこの上なく鮮かなのは、狭衣に讓位される直前の（ここは主として岩波大系本に従って原文を引いておこう）、

「まだ夜は深からん」とは、思しつれど、明けにけるなるべし。「恋草積むべき料にや」と見ゆる力車どもも、あまた遣りつつ行違ふを、車などもいたうやつし給ひて、人少ななればにや、憚る気色もなう、け近き程に乗りながら過ぐるも、恐しきまで思さるれど、「思ふ方さ

まへ」と御覧すれば、目とまり給ひて、なほ見送らるるに、何の姿とも見えず物狂ほしげなる様ども、さしもと思ひ知らぬにや、安らかに乗りなして、この頃、童べの口の端にかけたるあやしの今様歌どもを、いとおどろおどろしき声どもに歌ひ過ぐる気色、心をやりてないがしろに、思ひ事なげなるにつけても、
七車積むともつきじ思ふにも言ふにもあまるわが恋草
は
とぞ思しける。
という箇所であろう。これを、テキストの違いなどということは気にしないで中村訳で示せば、次のようにな

京都府・大原野の十輪寺。
業平がこの寺に隠棲していたと伝えられる。また、多賀幾子が、近くの大原野神社に参詣に来られた時、業平は塩を焼いてその煙にひそかな恋の想いを託したという。

十輪寺境内にある無銘の宝篋印塔は、業平の墓と伝えられている。
(下)

まだ夜が深いつもりでいたら、もう明けかかってきた。途中で、恋草をつむためかとも見える力車が、たくさん、押されて行くのとすれちがった。狭衣の車はわざとそまつなものにしてあって、供の者も小人数だったから、相手もはばかりな気もちにならず、すぐそばを、車からもおりずに通りすぎて行く。狭衣はそうした無骨な男どもを見るのが恐ろしい気がしたが、しかし荷車の列は自分が今、心をひかれていく方角へ引き返して行くのだと思えば、つい振り向いて見送りたくなる。男どもは自分の身なりの恐ろしげなもの知らぬ顔で、気もちよきように揺られながら、このごろ、流行りだした、妙な今様歌などを、胴間声をはり上げて歌い過ぎて行く。いかにも苦勞がなさそうである。

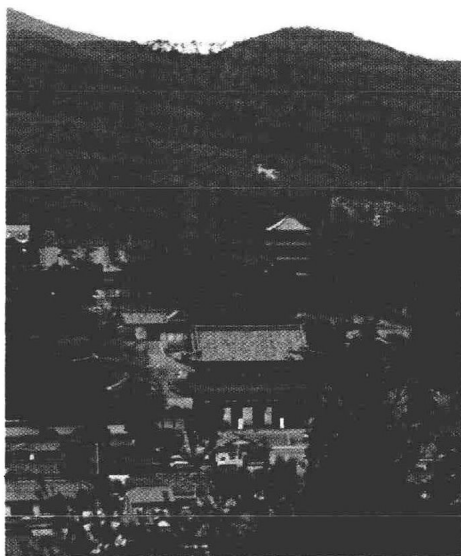
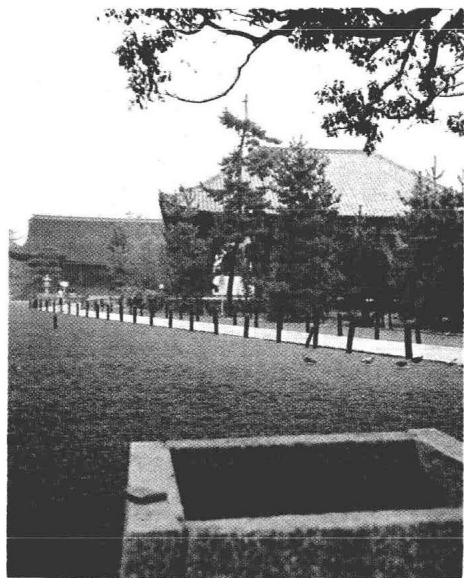
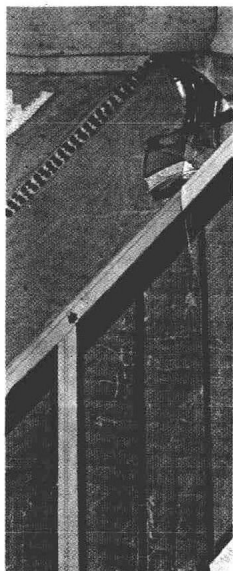
そうした男どもを見るにつけても、狭衣は、

七車つむともつきじ思ふにも

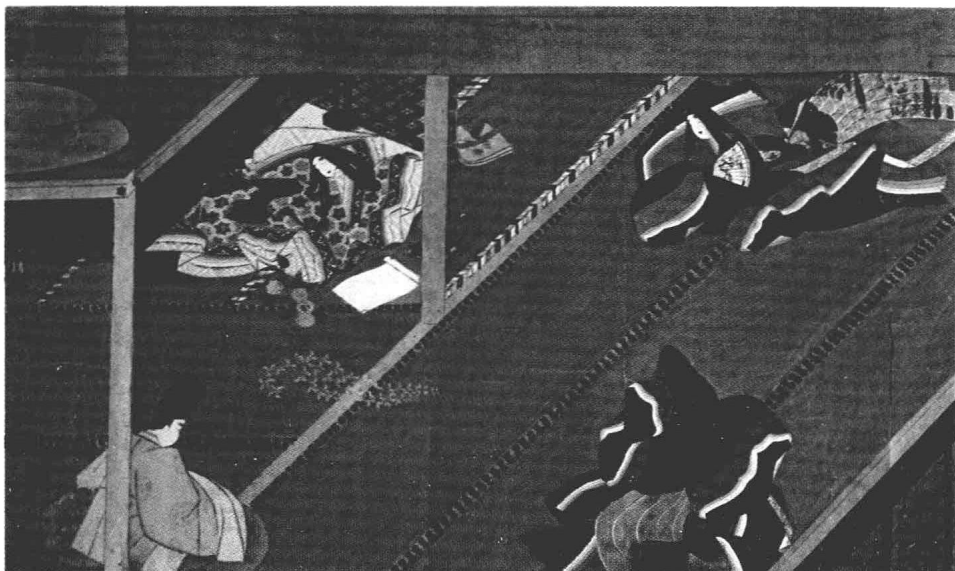
言ふにもあまるわがこひ草は

自分の恋草は、車に七はい積んでも、つきることはないだろう。……と思った。

もうじきに帝の位につく貴人と、力車を押して行く下層



京都市・仁和寺
この寺の祈禱師が、太
秦の広隆寺（左）に参
籠していた女に懸想し
て、これを誘拐する。
（狭衣物語・その二）



労働者。しかも前者に対して後者は、いささかの敬意も払わないし、やがて至尊の身となるはずの男は憂悶に悩んでいるのに、賤しい男たちはいささかも悩みがなく、気楽に唄を歌ってゆく。全篇の終り近いところにこの皮肉な構図をすえたあたり、社会小説の作家としての六条斎院宣旨の力倆は、まことになみなみならぬものだと言わなければならない。いかにも中流上層という階級にふさわしく、この帝王の悲慘を羨み、この貧民の幸福をきげすむこと、これが作者の社会観・人間観の根本ではあったのだろうか、長篇小説というまぎれの多い、複雑な大建築に献身することの功德は、そういう単純な分析から身を守る余地を、かなり多く彼女に与えることになったように思われる。つまり彼女は、卑しい俗物根性から出発しながら、もっと普遍的な人間への憐れみに到達しているのだ。

六条斎院宣旨の小説家としての技巧と力倆は瞠目に価するもので、現代の西欧の作家の一般的な水準を遙かに抜いているであろう。すくなくとも、今日の西欧小説の水準に達していることはやはり認めなければならまいし、これは執筆された時代を考慮に入れるとき、驚嘆するしかない文学的事件となるような気がする。たとえば、広い社会的視野を巧妙な筋のもつれのなかに盛りこんでゆく芸は、没落貴族の娘である飛鳥井の女の流転と衰亡に明らかであろう。そして、今姫君の入内をめぐる紆余曲折や、狭衣への譲位に至るまでの小説的な駆け引きは、ほとんど小憎らしいくらいである。作家はこのとき、読者をなめきつて思うがままに操ることに、無上の喜びを感じている。とすれば、読者もまた素直にそれに従えばいいし、そうするだけの値打ちは充分にあるのだ。国文学者はとかく『狭衣物語』を通俗小説あつかいするようだが、これは正統的な小説の

